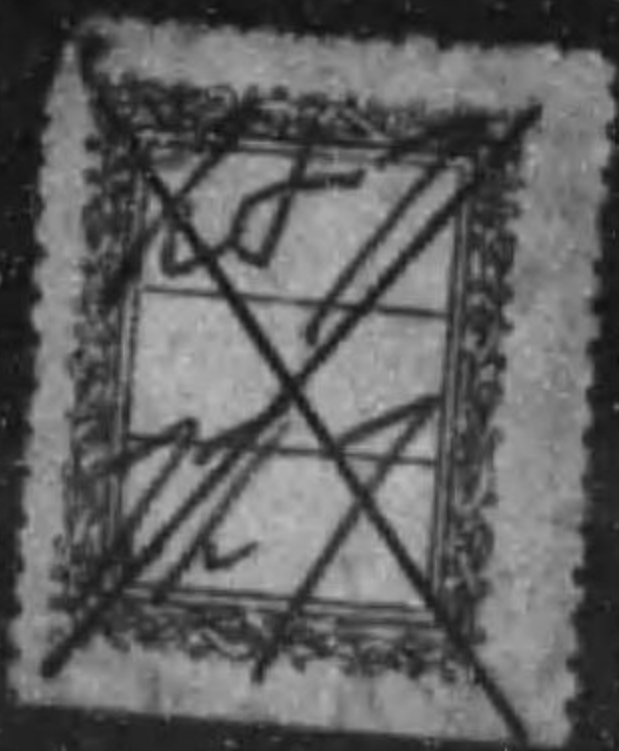


特///

677



始



特刊
677

日本生命保険株式会社 三宅 英著

ホルモン療法

図解説明書



「ホルモン」の言葉に就て

抑々ホルモンと云ふ言葉は希臘^{ギリヤ}で興奮^{キウケン}と云ふ意味を現はすものである今より二千年以前に希臘の醫聖^{イイセイ}ヒポクラテースが凡て病^{ヤク}は體內^{タイニ}に於ける内分泌^{ないぶん}作用^{さうよう}に缺陷^{けつせん}を生ずる爲なりと唱導^{しやうだう}せられたる其説^{そのせつ}が現代^{げんたい}に至り再び多くの醫學者^{いぎがくしや}に之をホルモン學説^{ホルモンがくせつ}と名附^{なづけ}られたるに大に研究^{けんきゆう}さるゝに至つたのである。即内分泌^{ないぶん}の働きに故障^{こさう}を生じて病氣^{びやうき}を形成^{けいせい}したる其病患部^{そのびやうくわ}に治療^{ちりやう}を加へて内分泌作用^{ないぶんさうよう}を増進^{ぞうしん}し血液循環^{けつえきじゆんかん}を良くし新陳代謝^{しんちんたいさ}を進め病氣^{びやうき}を治癒^{ちゆ}する方法^{はうほう}をホルモン學説^{ホルモンがくせつ}と云ふのである。

正附
11. 10.
内交

ホルモン灸療法

ホルモン灸療法とは疾病に罹れる患部の分泌作用を旺盛になし血液循環を良くし新陳代謝を進め以て病を治療する方法にして其施行法は晒綿布を塩水に浸し強く絞りて約一寸四方位に切りて四五枚を重ね小児には六七枚位となし之を別紙繪圖面に依りて定めたる治療點の上に置き其綿布の上より灸を据えるものとす。之のホルモン灸は普通の灸點の如く絶対に癍痕を遺さず且無害にして其効力偉大なれば實驗者は何れも驚かるゝところ病者は必ず一度本療法を試みらるべし。

頭部の病 (三十五穴)

第一圖——適應症——

- 一、急性鼻加答兒、慢性鼻加答兒 (第一圖) 八、九。
- 一、顔面神經痲痺、顔面神經痛 (第一圖) 十一、十二。
- 一、齒神經痛 (第一圖) 六、七、十。
- 一、眩暈、癩癩 (第一圖) 二、三。(第二圖) 二二、二二。
- 一、風眼、腦充血 (第一圖) 二、三。(第二圖) 二二、二二。

第二圖

- 一、鼻塞、小兒脫肛、半身不隨 (第二圖) 一五。
- 一、顏面神經痛 (第二圖) 一五。
- 一、眼球神經痛、腦痛 (第二圖) 一六。
- 一、中風、眼痛、腦充血 (第二圖) 一七、二二、二二。
- (第五圖) 九六。(第六圖) 一〇四。
- 一、嘔吐 (第二圖) 一八、一九。
- 一、耳下線炎、耳鳴 (第二圖) 二〇、二二。
- 一、ルイレキ、脚氣衝心、子宮出血 (第二圖) 二二、二二。
- 一、腦病一切 (第二圖) 二二、二二、二四、二五。(第五圖) 九六。(第六圖) 一〇四。

胸部、腹部の病

第三圖——適應症——

- 一、扁桃線炎 (第三圖) 二六、二七。
- 一、喘息 (第三圖) 二八。(第四圖) 六二、六三、七〇、七一。
- 一、氣管支加答兒 (第三圖) 三三、三四、四七、四八、五二、五三。(第四圖) 六一、六九、六三、七〇。
- 一、胸膜炎 (肋膜炎)、百日咳 (第三圖) 三三、三四、四〇、四一。(第四圖) 六三、六四、七一、七三。
- 一、肺出血 (第三圖) 二九。

- 一、腹膜痙攣、小兒胎毒 (第三圖) 三〇、三一。
- 一、胃病一切、嘔吐 (第三圖) 三〇、三一。(第四圖) 六六、六七、七四、七五。
- 一、腹膜神經痛 (第三圖) 三六、三七、四三、四四。
- 一、黃疸 (第三圖) 四九、五〇。
- 一、腸加答兒 (第三圖) 五四、五五。(第四圖) 六五、六六。(第四圖) 七三、七四。
- 一、心臟炎、腹痛 (第三圖) 三八、四五。(第四圖) 六七、七五。
- 一、腹疝痛、子宮痙攣 (第三圖) 三二。(第四圖) 八三、八六。
- 一、淋疾 (第三圖) 三二。(第四圖) 八三、八六。

- 一、尿閉 (第三圖) 三二。(第四圖) 八三、八六。
- 一、泌尿器病、子宮諸病 (第三圖) 三五、四六。(第四圖) 八四、八七。
- 一、手足倦怠 (第三圖) 五七。(第四圖) 六六、六七、七四、七五。

第四圖——適應症——

- 一、肩胛神經痛、肩凝 (第四圖) 七九、八〇、八一、八二。
- 一、小兒癲癇 (第四圖) 五九、七四、七八。
- 一、肺炎加答兒、肺結核、肺氣腫 (第四圖) 六二、六三、七〇、七一。

- 一、心臟病 (第四圖) 六三、六五、七一、七三。
- 一、發狂 (第四圖) 六三、六五、七一、七三。
- 一、肝臟病 (第四圖) 六七、七五。
- 一、腎臟病 (第四圖) 六八、七六。
- 一、腰痛 (第四圖) 六八、七六。
- 一、白帶下、赤帶下、子宮內膜炎、同外膜炎、其他子宮諸病一切 (第四圖) 六〇、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇。
- 一、大腸加答兒 (第三圖) 五〇。(第四圖) 六八、七六、九〇。
- 一、便秘、放尿、尿閉 (第四圖) 八四、八七、八五、八八。

- 一、痔疾、脫肛 (第四圖) 九一。(第六圖) 一〇四、一〇九、一一〇。
- 一、淋病 (第四圖) 九一。(第六圖) 一〇四、一〇九、一一〇。

手の病

第五圖——適應症——

- 一、肩胛關節炎 (第五圖) 九三、九四。
- 一、臂關節炎 (第五圖) 九五、九六。
- 一、臂痛 (第五圖) 九七、九八。
- 一、リウマチス關節炎 (第五圖) 九七、九八。

足の病

策六圖——適應症——

- 一、脚氣 (第六圖) 一〇七、一〇四、一〇二、一〇三、
(第五圖) 九六。
- 一、歩行困難 (第六圖) 一〇五。
- 一、リウマチス關節炎 (第六圖) 一〇三。
- 一、挫骨神經痛 (第六圖) 一〇六。
其他
- 一、半身不隨意 (第五圖) 九二。(第六圖) 一〇四。

- 一、中風 (第一圖) 二二。(第四圖) 八〇、八一。(第五圖) 九二。
(第六圖) 一〇四。
- 一、心臟炎、辨膜炎 (第五圖) 一〇〇。
- 一、感冒 (第五圖) 九九、九六。(第六圖) 一〇四。
- 一、不妊症 (第六圖) 一〇八、一〇四。(第四圖) 八四、八七。

治療上の注意

- 一、治療點の計り方は各人體格を異にするものなれば圖繪と能く
照合して定むべし。
- 一、一病症につき治療點數多きものは五六點位づ、順次に行ふも

可なり。

一、ホルモン灸は何病に依らず凡て灸五つとす。

一、艾は小兒は小を可とするも大人は成るべく大なるものを良しとす。

一、塩水の作り方は一合の水に約塩三勺を入れ能く溶解して用ゆべし。

一、綿布は強く絞りにて用ゆべし、重ねたる綿布は能く密着するやう押付けて用ひらるべし。

一、之のホルモン療法は朝夕二回を適度とすれども一回なれば午
前中を良しとす治療日数は全治する迄續行すべし但三週日試

みて全然効なき時は其人の體質本療法に適せざるものと知るべし。

一、妊娠中は腹部腰部の治療は必らず禁ずべし。

一、ホルモン灸は治療中何を食するも差支なし。

一、治療點を定むるには成るべく骨の上を避け押して通ずる所を撰むべし。

長命の灸法

長命の灸法といふは何時何人が創めたかは判らぬが、昔から傳へられて書物にもあり、又口傳秘法として相傳へられて、多くの

人の實行しつゝある所である。其實効があるか否かといふ事は、疾病治療の灸法の様に、遽かに之れを統計上に確かめることは不可能である、けれども現時に在ても、最近に於ても高老に達する人を調べて見るに、古來の習慣に隨つて、足の三里（第六圖一〇四）に炷灸して居るものが少くない、後に記する三河の萬平一家打揃ふて長壽を保つたといふことも、能く調べて見ると、全く秘傳の長命灸法を確く守つた爲であること云ふことで「萬平の一家かくの如く鶴龜の齡を保つこと古來其例なき祥瑞にして蓋し素因の存するものあらん」と記録されたのは實に此灸法を指したのである。

其方法は足の三里（説明圖にあり）に毎月一日から八日間、毎日前に左の數を炷へるのである。

女		男		
左	右	左	右	
八	九	九	八	第一日
九	十	十	九	第二日
十一	十一	十一	十一	第三日
十	十一	十一	十	第四日
九	十	十	九	第五日
九	九	九	九	第六日
八	九	九	八	第七日
八	八	八	八	第八日

但し男は左を炷へ終りて右を炷へ、女は右を先づ炷へ終りて左を炷へること養生灸と同じである。

以上を規定の通り過らぬやうにするのである、之れは萬平一家の

用ひた方法である。

萬平一家の長壽に關する記録は次の通りである。

天保十五甲辰の年九月十一日に江戸永代橋架換落成開橋式を行ふ此日松平伊豆守領分三河國寶飯郡小泉村農萬平なるもの一家三夫婦揃ふて渡り初めをなしたり、萬平は慶長七壬寅年七月生にして時に齡正に二百四十三才、其妻たく元和九癸亥年三月生二百二十才、悻萬吉慶安二己丑年八月生百九十六才、其妻もん承應元壬辰年生百九十三才、孫萬藏元癸八乙亥年八月生百五十一才、其妻やす寶永四丁亥年十一月生百三十八才なり。(灸療と長生法)より再録

大正十一年 九月卅日 印刷
大正十一年 掛川参田 發行

著作
所有

特價(二組)九十五錢

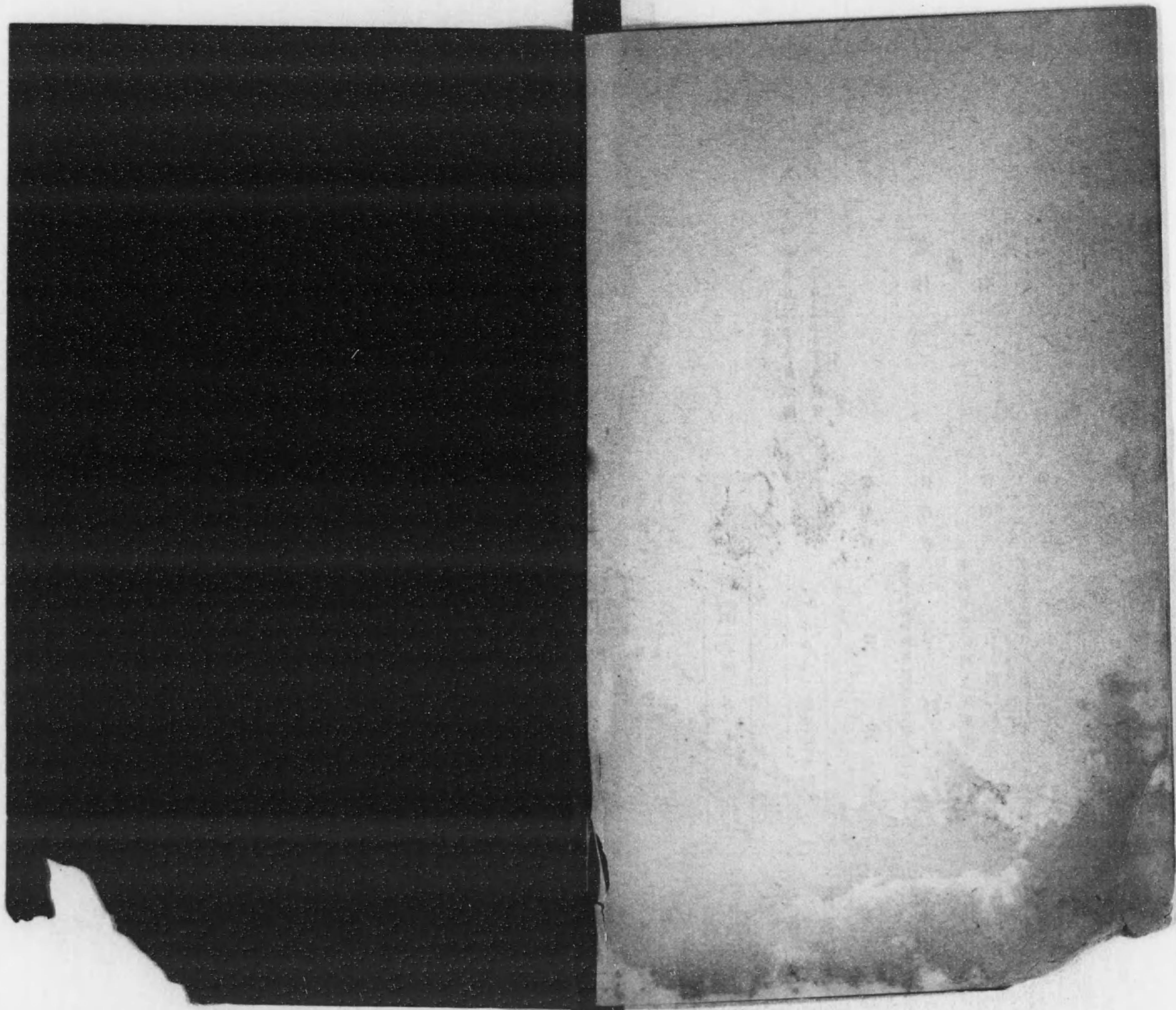
ホルモン灸療法奥附

著作者 三宅英

發行者 宇野富夫
東京市赤坂區青山南町六丁目四十八番地

印刷所 有敎社印刷所
東京市芝區西久保廣町十九番地

發行所 有敎社
東京市赤坂區青山南町六丁目四十八番地



終

